



# アカシア俳句会



令和三年 秋季俳句会 「句評」 兼題：月、台風(含・子季語)

## 一、「特選句」 選定句評

○「月光」の余韻を醸すペダルかな

戸堂博之

◆秋の月は美しい。降り注ぐ月光の下を走る自転車のペダルは美しい絵として心に残りました。

加龍恵子

○「序破急」と鳴いて飛び立つ法師蟬

中野亘子

◆三段階に鳴き分けたツクツクボウシが飛び立つ、が秋の到来を暗示していて自然な良い句だと思いました。

元永悦子

○一瞬の陽光雨の墓参り

中野亘子

◆亡き父は超晴れ男で、いまだにどんなに雨が降っていても、父の墓前に行くと雨が上がり、まさに一瞬の陽光なのです。

野本展子

○大雪に白赤緑競う秋

都 福仁

◆以前、車窓から見た素晴らしかった情景を懐かしく思い出して選びました。

岩崎悦子

○背を曲げて秋思のさまと自嘲せり

佐藤多恵子

◆誰しも避け難き老姿を、気品高き「秋思のさま」と詠まれた知性機智に敬服。是れ目指したき境地、至難なれど。

網 佑子

○亡き人の数々思ひ食む葡萄

佐藤多恵子

◆何年たってもこの時期になると、葡萄の一粒一粒食べることに懐かしい人、出来事を思い出してキリがありません。

吉田以登

○河内野の早稲田をちこち黄金色

佐藤多恵子

◆河内平野の広大な実りの秋を見事に詠み上げた秀句です。何度か挑戦したのですが私には出来ませんでした。

前田秀一

◆遠くにかすむ低い山並み、広々とつづく田園が泉北郡深井村のわたしの原風景です。「亡き人の」の句と迷いましたが。

山家由紀

○大空に義足飛び跳ね。パラの秋

加龍恵子

◆目の前で義足の選手が飛んでいるような躍動感があり、素晴らしい光景を詠んだ句です。

都 福仁

○名月に屋上で飲む一人酒

佐藤茂弘

◆ ゆつたりと月と天空を仰ぐ一人酒も、屋上のある邸宅も羨ましい。当方深夜の空ろな診察場でBGM大音響です。

岩壺克哉

○両手からごぼれし命秋深く

富岡訓子

◆ 「両手から」に深い想いを感じて選びました。医療逼迫で当然救える命が救えなかった残念さに思いを寄せました。

三木徳彦

◆ 人生わずか90年、これを片手にしても八十路を過ぎれば、両手に余る歳となりました。人生も冬眠前、秋深いものです。

佐藤茂弘

○可惜(あたり) 命特攻偲ぶ敗戦忌

網 佑子

◆ 戦時中、配属将校と担任により少年飛行隊や幼年学校への転向を強いられ、のち戦死した堺中学校徒の歴史を思う。

西村敏治

○かなかなや誰に尋ねて鳴くのやら

野本展子

◆ 十五年一緒に暮らし隆夫さんも共に見送った愛猫が亡くなり、寂しさ喪失感でいっぱい心に響いてえらびました。

富岡訓子

○頭下げ食べて食べてと稲穂かな

野本展子

◆ 秀句が多く辞書が手放せない中、この句は意味明快で、通学時によく見た秋の光景を甦らせて素晴らしいと感じた。

戸堂博之

○穂すすきや朝日に金の揺れどおし

吉田以登

◆ 朝日を受けて金色となって、薄の揺れ続けている様から、今日一日の活力を頂いていると感じる作者の喜びが伝わる。

本多通博

○曼茶羅や落葉の道を歩きけり

前田秀一

◆ 色とりどりの落葉が散り敷いた道は、まるで曼陀羅図かと感じられ、歩を進める作者の気持ちが表現されている。

中野亘子

○旧交や猪口がコップへ温め酒

前田秀一

◆ 情景が、目に浮かぶ素晴らしい句だと思います。

吉澤志保子

二、「編集後記」

秋季俳句会」の兼題は、秋の季節感から「月」、「台風」(含・子季語)を選び、少なくとも兼題を詠った一句を含め、秋の作品五句の投句をお願いしました。

先達の事例鑑賞句として、松尾芭蕉と正岡子規のほかに、原田柴野選二〇一六『俳壇』七月号二一二頁より、当会の師範と崇めている土生重次師の作品三句を挙げてみました。

名月や池をめぐりて夜もすがら

松尾芭蕉

柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規

草ぐさに日のゆきわたりたり台風過

土生重次

猫の眸の縦の一筋黄落期

土生重次

またたきは星にまさりて芋の露

土生重次

当会の前身「金剛俳句会」の当初にご指導いただいた小川誠二郎師は、講評・添削指導に際し、季語を活かし「一読句意味快」、「一句にひと節」(パンチの効いた句)、「則物具象」(物に語らせる)、「観念句を排す」(心のなかは他人には見えない)、「俳句は韻文の詩である。景を描写せよ」、「形容詞は弱い、名詞は強い。名詞で勝負せよ」、「自分は何に感動したのか、それを描写せよ」(説明は無用)等々、中でも特に土生重次師の持論「物に語らせよ」を繰り返し、教えの眼目を述べられました。

水温み鯉の背びれの水面切る ↓ 春光や鯉の背びれの水面切る

拙句を事例で恐縮ですが、土生師の説く基本を踏まえよいところを捉えているが、折角の描写を活かしきれていない。この句の主文は、「鯉の背びれの水面を切る」ところにあり、それに対して「水温む」(春の季語)は近すぎる。思いつきり離して「春光」(春の季語)を合わせるとよくなる。

季語は俳句の命、自分を表現するために季語の力を借りて活かすもので、読む人に季節感、連想感、リズム感など韻律を与える、と最後の最後に「○？」をいただきました。

土生重次師の教えの眼目を踏まえ、「アカシア俳句会」への「投句」作品も回を追うごとにレベルが上がり「選句」が難しくなっており、その動向が「選句」の広がり表れているように思われます。

当初、前回(夏季俳句会)と同じく、佐藤多恵子さんから「気づきのひとこと」をいただく予定でありましたが、佐藤さんから整形外科手術後の経過がすぐれず、「選句」に気力を集中させることが出来ない旨、ご自身の「選句」はもとより、全体的な「気づきのひとこと」ご投稿のお断りがありました。

編集人 前田秀一